報告

プロジェクト発信型英語における
オンデマンド型クラス間合同発表会の試み

阪　上　　潤

要　旨

コロナ禍で授業の形態は大きく変化した。立命館大学生命科学部・薬学部のプロジェクト発信型英語では、2008年度からオーディエンス入れ替えという活動を行ってきた。その目的は、他クラスの学生の発表へオーディエンスとして参加し、また、他クラスのオーディエンスへ発表することで、新しい視点を得ることである。しかし、このオーディエンス入れ替えの活動も、2020年度は中止となった。本報告は、2教師間でオンデマンド型クラス間合同発表会を行うことで、普段のクラスとは違う状況を作り出し、学生の学びをより活性化させようというオーディエンス入れ替え活動の維持・発展を目指した取り組みの成果である。

キーワード

プロジェクト発信型英語、交流、オンデマンド、クラス間合同発表会

1　はじめに

立命館大学のプロジェクト発信型英語[1)]は、現在、4学部で展開されており、学生はそれぞれの興味・関心に基づいたプロジェクトを実施し、その成果をプレゼンテーションとペーパーの形で発表する。その特徴は、学生自らがリサーチに基づき、まだ明らかになっていないことを見つけ、それに対して実験などを行い検証し、明らかになった新発見を報告することである（山中・木村・山下・近藤、2021）。筆者が担当した生命科学部と薬学部では、1回生前期のProject 1から2回生後期のProject 4までアカデミック度を増しながら進む。そして、3回生前期のJunior Project 1では、専門の先生にも意見をもらいながら、学部の専門分野に関するプロジェクトを行い、ポスター発表で成果を示す。

その中で、最終プレゼンテーションを他クラスの学生が聞きに来る、また他クラスの学生の発表を聞きに行くという、オーディエンス入れ替えの活動を2008年度から行ってきた。いつもとは違うクラスの学生の発表を見ることで、新しい視点や考えを得る機会を作り、学び合いを生むことが活動の趣旨である。実際に落合・大賀（2021）ではクラス合同の優秀者発表会でクラス

代表となった 12 名中 9 名が、他の発表者と比較して、次回以降の参考になったと述べている。また、プロジェクトデザインの科目で 2 クラス間の合同中間ポスター発表会を実施した秋山他（2020）では、発表会の実施に対して肯定的な学生が多かった。また、参加者はさらに肯定的になったとしており、プレゼンテーション科目における、他クラスの学生との交流の効果が示されている。

しかしながら、コロナ禍の影響でオンライン授業となった 2020 年度は、プロジェクト発信型英語におけるオーディエンス入れ替えの活動は中止となっていた。そのような状況下でも、普段のクラスとは違う状況を作り出し、学生の学びをより活性化させるという、オーディエンス入れ替え活動の目的を果たせる活動は無いか考え、2020 年度、2 回生後期の Project 4 の中間報告会という形で、2 教員間、8 クラスのオンデマンド式クラス間交流を行った。その成果を、学生へのアンケート、動画の視聴回数や発表に対する学生間のコメントから分析する。なお、学生には個人名がわからない形でデータを使用することに対して許諾を得ている。

2　具体的な取り組み

2.1　対象者

今回の取り組みは、生命科学部 2 回生後期配当の英語科目である Project 4（P4）を受講した、火曜日 4 クラス、金曜日 4 クラスの、8 クラス計 126 名を対象とする。1 クラス分、オンライン上のコメントが消えてしまったため、そのクラスは視聴回数などの分析からは除き、アンケート結果のみ分析対象とする。

P4 では、他の科目と同様に、学生は自分の興味関心に基づき、独自のプロジェクトを立ち上げ、その成果をプレゼンテーションとペーパーの形で報告する。ただし、他の科目との違いは、1,500-2,000 語程度の本格的なペーパーの執筆が第一の目標となり、ペーパーの執筆が活動の中心となることである。そのため、他の科目で正式に設定されている中間発表も、P4 では定められておらず、実施は各教師に任されている。2020 年度後期の活動のため、1 回生後期の Project 2（P2）でも可能であったが、プロジェクト英語とオンライン発表に慣れている最中の P2 では、それまで同様、オンラインのライブ形式での実施が望ましいと考えたため、P4 を今回の取り組みの対象とした。

2.2　取り組みの流れ

今回の合同発表会は、学期の真ん中の第 8 週目に、中間報告会という形でおこなわれた。学生は、合同発表会実施の 2 日前の 23 時を締切として、制限時間 5 分の発表動画の作成に加え、名前と発表の題名、そして自身の発表のアピールポイントを提出した。発表動画は大学で契約しており無償で使用できる OneDrive[2] に提出し、名前・題名・アピールポイントは Google Forms から入力する形式をとった。動画の撮影に加えて、準備の負担が大きくなり過ぎないよう、アピールポイントは日本語で書いてよいこととした。表 1 は学生のアピールポイントの一例である。次に、教員は提出されたアピールポイントなどを、授業曜日ごとにまとめ、合同発表会前日に該当曜日の学生に LMS 上で配布した[3]。発表会当日、学生は配布されたアピールポイントを基に自

分が興味のあるタイトルを OneDrive 上で視聴し、その動画に OneDrive 上でコメントを書きこんだ。授業当日に視聴するべき回数と、合計で視聴する回数を設定し、当日分以外は、次回授業までのいつに視聴・コメントしてもよいという形をとった。なお、設定した視聴回数を上回っての視聴は自由で、実際に課題以上の数を視聴し、コメントを書いた学生もいた。今回の取り組みは 2 教師間でおこなったが、合同発表会の週の課題は異なる。1 名の教師は、8 名以上の動画にコメントすることに加え、ペーパーの次の章を書くことを課題とした。もう 1 名は、17 名以上の動画を視聴しコメントを書き、ペーパー執筆に関しては通常よりも少ない分量を課題とした。

表 1　アピールポイント集の一例

Learn more about the different culture !	アジア諸国に焦点を当てた異文化理解を軸に、来年開催の東京オリンピックで日本は外国のお客様にどのようなおもてなしが出来るのかを考えます！
How to teach more effectively ?	時間の効率の良い使い方を身に着ける方法を探るテーマです。
Is curiosity needed for human development	人間の持つ好奇心が人類の発展にどのような役割を果たしてきたかを調べて発表します。
What does Kanji we write show?	同じように漢字を習って書いても、誰一人として完全に同じ漢字を書く人はおらず、個性がでる。そこで、以前私は、漢字にはその人の性格が表れるということを聞いた。その曖昧な事柄を明確にするために今回調査を進めている。また、性格以外にも漢字に表れている要素はあるのかという事柄も調査を進めている。今回の中間発表ではまだ完全でないため、得られた結果・考察を述べることはできないが、最終発表でこれらを述べるつもりである。
How do we throw faster ball?	実験（分析と実験結果）が結構凝っています。中間発表は実験結果はありませんが。
Best beef bowl restaurant	あえて、牛丼という身近なものに焦点を当てました。すき家、吉野家、松屋のどの牛丼屋が優れているのか検証します。
Make your body changing!	2 か月に渡るチャレンジ企画！短期間で体は変わるのか、人が気になっているけど自分ではやろうとは思わないところに挑戦すること
New format of high school soccer player training	高校サッカー育成の新しい形式を考えた
Learn from garbled	文字化けって本当に悪いことだけなのかというところに注目しました。 うまく文字化けを使えば個人情報とか守れるんじゃね？っておもいました。
The way to find a sweet orange	これからの季節にぴったりのテーマです。コロナの第 3 波が不安ですが、楽しみを増やす 1 つのテーマとして聞いていただけたらと思います。

2.3　分析方法と目的

本報告では、動画の再生回数、動画へのコメント、ベストプレゼンターがどのクラスにいたか、そして学生へのアンケート結果を分析の対象とする。

2.3.1　動画の再生回数

学生がどの程度積極的に視聴したかを測るため、動画の再生回数を分析項目とした。OneDrive 上には YouTube などと同様に、各動画の再生回数が表示されるため、その数値をデータとして採用した。ただし、提示される数値は再生回数のみで、最後まで視聴されたかや、動画の再生時

間はわからない。動画のどの部分が視聴されたかという、閲覧者のリテンション期間[4]は確認できるが、分析が複雑となるため、今回は再生回数のみを分析の対象とした。なお、動画を再生しながらコメントを付けられ、また再生しなくとも自分に届いたコメントを確認できるため、これらにより必然的に再生回数が増えていくという訳ではない。

2.3.2　動画へのコメント

他クラスとの交流が出来ていたかを測るため、他クラスの学生へ宛てたコメントの割合、そして他クラスの学生からもらったコメントの割合を分析する。学生がコメントを投稿する際には、コメントの内容は質問でも感想でもいいが、「面白かった」など一言ではなく、出来るだけ具体的にどこが面白い、もしくはわかりにくかったかなどを書くように指導した。P4 は英語科目の為、コメントは英語で投稿することとした。

2.3.3　ベストプレゼンター

今回の取り組み後、見た動画の中で一番良かったものはどのクラスの学生のものだったかをアンケートで尋ねた。他クラスにベストプレゼンターがいたとすると、それは今回の取り組みを行わなければ見られなかったものである。一番良いと思うものは参考になる可能性が高いと考えられるため、分析対象の一つとした。

2.3.4　アンケート結果

学生がどのような感想を持ったか知るため、合同発表会の後、参加した学生に対して、匿名でアンケートをおこなった。そこで得られた自由記述と 5 段階評価の回答を分析する。

3　結果

本章では、合同発表会を行った結果を、参加した学生へのアンケート、動画の視聴回数、コメントの分析から示す。便宜上、火曜日の 4 クラスを T1 ～ T4、金曜日の 4 クラスを F1 ～ F4 とする。なお、前述の通り、OneDrive 上にあった 1 クラス分のコメントと視聴回数のデータが消えてしまい、修復を試みたができなかったため、T4 クラスに関しては提示できないデータがある。

3.1　動画の再生回数

はじめに、クラス毎の動画の再生回数を示す（表 2）。クラス動画再生回数は、そのクラスの学生が投稿した動画が実際に視聴された回数を指す。クラス人数と動画投稿数に違いがあるのは、ペアで 1 つのプロジェクトを作成している学生もおり、その場合は動画も 2 人で 1 つになったからである。想定再生回数は、仮に各クラスが個別に発表会を行い、通常の発表のように、全員が他の全員分を視聴したと仮定したときの値であり、「人数×（動画数 -1）」で計算される。実際の再生回数との比較のために、この想定再生回数を示している。

表２　クラス毎の動画視聴回数

	クラス人数	動画投稿数	クラス動画再生回数	想定再生回数
T1	17	16	502	255
T2	14	14	330	182
T3	22	21	1155	440
F1	15	15	512	210
F2	13	13	328	156
F3	15	15	433	210
F4	16	13	449	192
総計	112	107	3709	1645

各クラスとも、想定再生回数、つまり自分たちのクラスメートの分すべてを見るよりも２倍程度視聴されていた。また全体として課題として設定された数よりも多く視聴されていた。

3.2　動画へのコメント

次に、学生が投稿したコメントの分析を行う。表３は自分たちがもらったコメントのうち、どれぐらいが他クラスの学生から投稿されたものかをクラス毎に示している。また、表４は自分たちが投稿したコメントのうち、どれぐらいが他クラスの学生へのものだったかをクラス毎に示している。自分たちは積極的に他クラスの動画にコメントするが、自分達の動画に対して、他クラスの学生からのコメントが少ないなどの特徴を明らかにするため、両方のデータを提示した。表中の他比率は、表３では自分たちがもらったコメントの総計のうち他クラスからのコメントの割合、表４では各クラスの学生が投稿したコメント総計のうち、他クラスの学生にあてたものの割合を指す。

表３　もらったコメント数に占める自クラスと他クラスからの数

	総コメント数	自クラスから	他クラスから	他比率（%）
T1	177	133	44	24.9
T2	97	57	40	41.2
T3	211	131	80	37.9
F1	168	95	73	43.5
F2	101	39	62	61.4
F3	179	88	91	50.8
F4	188	147	41	21.8%
総計	1121	690	431	38.5%

表 4　投稿コメントにおける自クラスと他クラスへのコメント数

	総コメント	自クラス内へ	他クラスへ	他比率（%）
T1	189	133	56	29.6
T2	89	57	32	36.0
T3	149	131	18	12.1
F1	167	95	72	43.1
F2	82	39	43	52.4
F3	123	88	35	28.5
F4	245	147	98	40.0
総計	1044	690	354	33.9

自分達がもらったコメントのうち、少ないクラスで 21.8％、多いクラスで 61.4％、平均で 38.5％が他クラスの学生からのものであることが明らかになった（表 3）。また、投稿したコメントのうち、少ないクラスで 12.1％、多いクラスで 52.4％、全体では 33.9％が他クラスの学生へのコメントであった（表 4）。表 3 と表 4 の総コメント数などに違いがあるのは、T4 クラスのデータが無いからだが、明らかになったデータから計算すると、T4 の学生は積極的に他クラスの学生へコメントしていたことがわかった。

また、今回見た中で一番良かった、ベストプレゼンターは誰かと聞いた結果を表 5 に示す。

表 5　ベストプレゼンターはどのクラスにいたか

	自クラス学生への投票数	他クラス学生への投票数	他クラスへの投票の比率（%）
T1	9	4	30.8
T2	9	3	25.0
T3	11	2	15.4
T4	8	6	42.9
F1	4	1	20.0
F2	6	7	53.8
F3	11	5	31.3
F4	7	0	0.0
総計	65	28	30.1

全員が自クラスにベストプレゼンターがいたとする F4 クラスから、50％以上の学生が他クラスにベストプレゼンターがいたと回答した F2 クラスまであり、クラス毎に大きなばらつきがみられた。合計すると、自クラス：65（69.9％）、他クラス：28（30.1％）となった。

3.3　アンケート結果

合同発表会終了後、参加した学生に対して、匿名でアンケートをおこない、96 名から回答を得た。そのうち、満足度、自身の発表への評価、今後への役立ち度の結果を示す（表 6）。

表６　合同発表会に対するアンケート結果

合同発表会に対する満足度

	大変 良かった	まあまあ 良かった	どちらとも 言えない	あまり良く なかった	全く良く なかった
件数	13	65	16	1	2
割合（%）	13.4	67.0	16.5	1.0	2.1

自身の発表への評価

	大変 良かった	まあまあ 良かった	どちらとも 言えない	あまり良く なかった	全く良くな かった
件数	3	19	44	29	2
割合（%）	3.1	19.6	45.4	29.9	2.1

今後の発表への役立ち度

	大いに 役立った	ある程度 役立った	どちらとも 言えない	あまり役立 たなかった	全く役立た なかった
件数	23	62	11	1	0
割合（%）	23.7	63.9	11.3	1.0	0.0

まず、今回のオンデマンド中間発表の実施についてどう思われましたか？と合同発表会に対する感想を聞いた結果、「大変良かった」と「まあまあ良かった」の合計が80%を超えた。「大変良かった」、「まあまあ良かった」回答の理由として、「学部学科を超えて周りの人たちがどのような研究をしたいのかを知ることが出来てとても興味深かった。」など、他のクラスの人の発表が見られて良かったと回答した学生が34名で最も多く、他の人の動画を見ることが参考になった（12名）、何回も見ることが出来た（9名）、自分のタイミングで見ることが出来た（7名）、フィードバックをもらえたことが参考になった（5名）と続いた。一方、「全く良くなかった」、「良くなかった」理由としては、他のクラスとのクオリティの差があったこと（2名）、時間の余裕が無く、満足いくクオリティのものができなかったこと（2名）が挙げられた。

次に、自身の発表はどうだったかを聞いたところ、合同発表会の満足度より、良かったという意見が大幅に減った。その理由としては、「聞きやすさと分かりやすさを優先しすぎてグラフや表の少ない、あまり学術的ではない発表動画になってしまったと思います」や「話し方もスライドもあまり工夫がなかった」など、自分の動画を見て改善点があった（21名）ことが最も多く、準備不足（8名）やフィードバックにより不十分な点が見つかった（3名）がその他の理由として挙げられた。

そして、今回の合同中間発表会が、最終発表に向けて自身の発表を改善するのに役立ったかという問いに対しては、「ある程度役立った」、「大いに役立った」が87%以上を占め、「あまり役立たなかった」、「全く役立たなかった」が1人のみであった。どのような点が役に立ったかについては、次のような点が理由として挙げられた。箇条書きの個所は、実際のコメント例を原文のまま載せている。

他の人の発表から気付き・学びがあった（34 名）

- ほかの人の発表を見ることで、自分の立ち位置を知ることができ、もっとアカデミックな発表ができると感じたこと
- 聞きやすさが声の大きさにかなり左右されるということ
- クラス内の生徒だけではなく、他のクラスの生徒の発表を聴けたことでどのように検証を行っているのか等がよく分かった点

コメント（フィードバック）から気付きがあった（11 名）

- コメントがたくさん来て直すべき点がよく分かった。
- 他のクラスのコメントをもらえることで見ず知らずの人の意見を反映することが可能になること
- 自分がわかっているから説明を省略してしまっていて、初めて見る人にはわかりづらいということがあった

自分のプロジェクトを見つめ直すきっかけとなった（7 名）

- 発表するにあたって自分の考えを簡潔にまとめることが必要だったので、さらにテーマへの理解が深まった点が良かった。
- 一度中間発表として自分のプロジェクトをまとめることができたので、最終発表までに何を補足していく必要があるか考えることができた。

リサーチの仕方からスライドの作り方や話し方まで、他の人の発表を見ることや、得られたフィードバックから大きな学びがあったことが明らかになった。

最後に、今後に向けての改善点を聞いたところ、時間が足りないので課題を減らす（13 名）、もっと早めにアナウンスを（4 名）、発表動画で顔出しをした方がいい（3 名）、発表時期をずらした方がいい（2 名）、実施するクラスとそうでないクラスがあるのは良くない。統一するべき（1 名）、発表者の原稿が見れると良いと思う（1 名）、コメントを非公開にしたほうがいい（1 名）のような回答が得られた。様々な意見があるが、課題が多く準備にとれる時間が足りない、関連して実施のアナウンスが遅いことが大きな部分を占めた。

4　考察

4.1　動画視聴回数について

今回、課題を行うのに必要な数を上回る視聴回数が計測された。学生はある程度興味を持って動画を視聴したと考えられる一方、最初の数分だけを見た、1 つの動画を 2 回に分けて視聴した、などの理由で再生回数が多くなっている可能性もある。そのため、正確な数字で証明できたと言うには不十分であるが、前述の通り、コメントを投稿するのに 2 回再生する必要はなく、また、自分へのコメントを確認するのに再生する必要もないため、ある程度興味を持って、色々な学生の動画を視聴したと考えられる。

4.2　コメントについて

全体として見ると、総コメント数の 33.9％が他クラスの学生に向けたものであったことから、積極的に他クラスの興味のある動画に対して意見を言っていたことがわかる。ただし、クラス毎に見ると、T3 クラスのように、自分達はほとんど他クラスへのコメントをしないが、他クラスからのコメントはもらうクラスがある。逆に F4 クラスのように、他クラスへ積極的にコメントをするが、あまり他クラスからのコメントはもらえないクラス、そして数値にばらつきはあるが F2 クラスのようにバランスの取れたクラスが出ることがわかった。今回は、制限なく興味のある発表を見て学んでほしいという意図から、他のクラスの学生へのコメント数は設定しなかった。しかし、普段と異なる学生の発表を見ると同時に、普段とは違う学生からコメントをもらうことも重要な学びとなる。動画を見ること、フィードバックを得ること、両方の学びを各クラスに確保するため、より積極的な他クラスへのコメントを促したり、2 つ以上は他クラスの学生の動画にコメントすること、などの指示をすることも考えていきたい。

4.3　ベストプレゼンターについて

クラス毎に大きなばらつきがみられたが、合計すると約 30％の学生が自クラス以外にベストプレゼンターがいたと回答した。この 3 割の学生にとっては、この活動を通してより大きな学びがあったと考えられる。

4.4　アンケートについて

全体的に肯定的な意見が多かったことから、学生にとって今後の役に立つ活動だったと捉えていることがわかる。いつもは見られない他のクラスの学生の発表を見たり、他クラスの学生からフィードバックをもらえたことや、自分のタイミングで何回も見れたことを評価する意見が多かった一方、時間が無いために満足いくものが作れなかった、他クラスとのクオリティの差から学ぶものが少なかったと感じた学生の満足度は低い結果となった。

対して、自らのプレゼンに対する満足度は低くなった。理由として、準備不足という意見が多かったが、今回の取り組みは学期前から実施を予定していたわけではなく、学期途中に話し合いの中で実施を決めた。1 か月前頃に実施を伝え、少しずつ準備をし、課題も調整してきたが、学生にとっては、通常の課題をこなす中で準備が難しい面があり、このことは大きな反省点である。この点に関しては、学期の初めにはアナウンスしておくこと、また、より詳細な計画を練り、課題を分散させることで、中間発表の週はそれだけに集中できるようにすることが解決策となり得る。動画内での顔出しについては、今回は強制はしなかったが、ほとんどが顔を出さない発表であった。出来るだけ顔出しを促すなど、この点に関しても改善策を考えていきたい。他には、自分の発表の振り返りや、フィードバックから改善点が見つかったことが、自身のプレゼンテーションに満足できなかった理由として挙げられた。しかし、これらは自分の発表の改善点を知るという点では、中間発表の段階で明らかになって良かったこととしても捉えられる。

以上のことより、改善点はあるが、普段のクラスとは違う状況を作り出すことにより、学生の学びをより活性化させるという目的はある程度果たせたと考えられる。

4.5　オンデマンド型の利点と課題

今回は、ライブ形式ではなく、オンデマンド型を採用し、合同発表会をおこなった。その結果、利点と課題が見えてきた。

利点として挙げられるのは、制限なく自分の興味のある動画を視聴できることである。アンケートにも、色々なクラスの学生の発表を見られて良かった、というコメントが見られた。対面やオンラインのライブ形式で行った場合、一つの固定されたクラスに行くか、移動できる場合も同時刻には一つの発表しか見ることができない。そのため、全体から興味のあるトピックの発表を自由に選ぶことができることは、オンデマンド型の利点である。

また、聞き逃した箇所をもう一度聞くことができることもオンデマンド型の利点と考えられる。実際のコメントとして、「リアルタイムでの発表だと聞き逃しが多くて深い理解ができないことが多かったが、何度も動画を見返せるので内容を理解しやすく質問も考えやすかった」など、一度では理解できなかった箇所をもう一度聞くことで理解できたという声も多かった。関連して、好きなところで動画を止めてスライドを確認したりすることができて良かった、という回答もあった。これらのことから、より深い内容理解を促せた点もオンデマンド型の利点の一つである。

一方で、利点として挙げたものは課題にもなり得ることが明らかとなった。動画を何度も見返すことができるということは、一つの動画の視聴にかかる時間が長くなる可能性があるということである。実際に「発表を動画でいつでも視聴できるのは良かったけど、評価やコメントに時間がかかりすぎて授業時間内に全く終わらなかった。」という意見があった。その週の活動内容の決定は、5 分間のプレゼンテーション動画を視聴してコメントをすることを前提に行った。しかし実際には、一つの動画の視聴に何倍かの時間をかけている学生も多くおり、このことが負担を増やしてしまう結果に繋がったと考えられる。このことは大きな課題の一つであり、今後の活動内容の決定に活かしていきたい。

また、自分の興味のある動画のみを見られることは、可能性を狭めてしまうことも考えられる。合同発表会の趣旨である、いつもと違う環境を作り出す、ということを考慮すると、自分のトピックと関連性が低い発表から何かを学び、またコメントできることは大事な要素である。今後は、一つは関連性が低い動画を見るように指示するなど、より幅広い活動を目指していきたい。

5　おわりに

普段とは違う学び合いを求めて、プロジェクト発信型英語において、オンデマンド式合同発表会をおこなったところ、他クラスの学生へのコメントが 3 割を超え、積極的に他クラスの動画を視聴したことがわかった。また、事後アンケートには、この取り組みが、「大変良かった」、「まあまあ良かった」、という回答が多かったことから、学生の視点からも有意義であったことがうかがえる。その一方で、負担が大きかった、という回答も多く、学生の負担を軽減する必要があるという、大きな課題が残った。また動画の視聴回数については、実際にどれぐらいきちんと見られたのか、再生時間などの指標も追加する必要がある。今後は、これらの点を解消しながら、コロナ禍であっても、また、コロナ禍が終わった後でも行うことができる、より効率的な学び合いの場を作れるようにしていきたい。

6　謝辞

今回の活動は、延田リサ先生（立命館大学言語教育センター）と計画から実施まで行った。一人ではできない活動をさせていただいたことに感謝申し上げます。一方で、私の確認不足により、本報告が単著となってしまったことをお詫びいたします。

注

1）プロジェクト発信型英語プログラム http://pep-rg.jp/（2022 年 8 月 31 日最終閲覧）

2）立命館大学における OneDrive の利用などは「Ritsumeikan IT Support」を参照。https://it.support.ritsumei.ac.jp/hc/ja（2022 年 8 月 31 日最終閲覧）

3）立命館大学は manaba+R を LMS（Learning Management System）として使用している。https://www.ritsumei.ac.jp/ct/（2022 年 8 月 31 日最終閲覧）

4）閲覧者のリテンション期間などは Microsoft を参照。https://learn.microsoft.com/ja-jp/stream/streamnew/video-analytics-viewership-retention（2022 年 8 月 31 日最終閲覧）

参考文献

秋山綱紀・堀晴菜・渡辺秀治・館宜伸・坂本香織・松本重男.（2020）.「プロジェクトデザイン I におけるポスター形式による 2 クラス合同成果発表会の実施とその効果 ; Effects of Joint Poster Sessions among 2 Classes in" Project Design I"」『工学教育研究 ; *KIT progress,*』、第 28 号、2020 年、86-95 頁。

落合淑美・大賀まゆみ.（2021）.「必修授業でのクラス合同発表会イベント実施の試み : 発表者は何を学ぶのか」『JACET 関西紀要 = JACET Kansai journal』、第 23 号、2021 年、177-182 頁。

山中司・木村修平・山下美朋・近藤雪絵『プロジェクト発信型英語プログラム : 自分軸を鍛える「教えない」教育』北大路書房、2021 年。

On-demand Joint Classroom Presentations in Project-based English Classes

SAKAUE Jun（Syokutaku teacher, Ritsumeikan University）

Abstract

The format of classes has changed significantly due to the Corona Disaster. With the introduction of online classes in project-based English in College of Life Sciences and College of Pharmaceutical Sciences, the activity of audience switching, in which students participate as audience members in the presentations of other classes and also present to the audience of other classes, which had been conducted since FY2008, was discontinued in the FY2020. This report shows the result of efforts to maintain and develop the audience-switching activity, which aims to stimulate student learning by creating a situation different from that of a regular class through on-demand joint presentations between two teachers.

Keywords

project-based English learning, exchange, on-demand, joint class presentations